

佳作賞受賞者

佳作賞

「柔らかな裂けめ」

「黄色い潜水艦」 67号

木下衣代氏

木下衣代（きのした・きぬよ）

一九六五年一月二十八日生まれ。五十三歳。

兵庫県立星陵高等学校卒業。

明石短期大学デザイン美術科卒業。

広告会社勤務を経て、現在。

懶キノシタクリエイト取締役。

配偶者あり、子供二人。

現在、大阪市港区在住。

「柔らかな裂けめ」

三十九歳の千尋は、三つ年下の颯介と暮らしていた。千尋は劣等感が強く、頭も外見もいい颯介とは、自分とは釣り合いだと思っている。

六年前、いつしよに暮らし始めた颯介と、さびれかけた遊郭の通りを歩いたことがある。古びた家には飾り窓があり、ほほ笑む娼婦をみたとき千尋は衝撃を受けた。今はその通りの近所でパートの店員をしているが、それ以来その通りには近づいていない。

ある朝、車で千尋は際立つて美しい女をみかけた。自分と入れ違いに電車に乗ってしまうその女にみとれた千尋は、それから毎朝その女をみかけるようになる。

颯介がとげん会社を辞め、そのことを数日言わずにいたが、気づいた千尋が遠慮がちに聞くと激昂して暴力をふるう。千尋はただ怯えながらその嵐が過ぎ去るのを待つだけだった。颯介が暴れるときはいつも、身体を小さく丸めながら、自分などなくなってしまうたいと願うだけなのだ。逃げ場のない暮らしの中で、千尋は女の姿に心洗われるようになる。あんなに綺麗だとどんなにいいだろうとうつとり空想するのだ。それは親にさえ気にかけてもらつたことがない千尋の境遇とはまるで違うもので、颯介と会うまで千尋はひとり生きてきたのだった。

た。疲れきつた千尋は、その姿を見苦しいと思い、思つたとたん颯介を殴りつけた。男のみつともなさに初めて気づいた千尋は、可笑しさのあまり力が湧く。

椅子を振りかざしながら、千尋は自分が解放されるのを感じていた。

第12回神戸エルマール賞

文芸講演会 総会 贈呈式祝う会 開催

日時 2018年（平成30）10月28日（日）正午より
会場 ラッセホール（兵庫県教育会館）
神戸市中央区中山手通4-10-8
TEL078・291・1117

●総会 午後12時～12時30分 5Fサンフラワーの間
●講演 午後1時～2時45分 5Fハイビスカスの間

講師 作家 木下昌輝氏（直木賞候補3回）
演題 「書くことで、自分の居場所を創る」

●贈呈式・祝う会 午後3時～5時 2Fローズサロンの間

——総会は会員のみ。講演会は無料、一般参加歓迎。
贈呈式祝う会は、会費七〇〇〇円

ふとしたきつかけで颯介と出会つたが、思いかえすと千尋は自分が強引だつたような気がしていた。

颯介は仕事を探しだしたがなかなかうまくいかず、千尋にすまなく思うのか、家事を手伝つてくれたりするようになる。自分のような取り柄のない女にそんな値打ちはないと颯介に伝えようにも、千尋にはうまくできない。かえつて颯介の怒りを誘うようになる。

日に日に颯介の暴力は苛烈になり、千尋は疲弊していく。それでも苦しそうな颯介がすぐてくると、千尋は受け入れるだけだ。自分のような醜い女になぜ欲情できるのだろうと訝しみながら。

パートの時間を延ばして働くようになった千尋は、夜に女が駅に降り立つのに出くわす。朝の物憂げな様子とは違う女を、千尋は追いかけていった。たおやかで上品にみえた女は、ためらうことなく売春宿に入っていく。飾り窓のなかで、女は艶然とほほ笑んでいた。

翌日から、女をみかけなくなつた。女の美しさをもう一度みたい千尋は、憑かれたように女の姿を駅を探す。仕事もおろそかになつていくが、千尋はほかのことはどうでもよくなつていく。それでも女には会えなかつたが、遊郭まで探していく勇氣はない自分を惨めに思いながら、千尋は家にもどる。

家では、颯介がいつものように些細なことで激怒し始め